日刊
動労千葉
86. 9. 6
No. 2344
国鉄千葉動力車労働組合
千葉市要町二─一八（動力車会館）
（鉄電）二九三五～六・（公衆）〇四七二（22）七二〇七

マル生四組合『改革労協』の実態

およそ労働組合らしからぬ……鉄労
上部新産別にも従わぬ……全施労
『ゴマをするなら』……真国労

総評・県評から総スカン…動労革マル

九月二日、総評は動労の総評脱退について説得を断念し、単産・県評に脱退を報告することを決定、また同日、動労・鉄労らマル生七組合で結成した『国鉄改革労組協議会』（議長・鉄労志摩組合長）は、会議をもち、十月をメドに連合体移行で一致したという。事態は「一一月ダイ改」へ急ピッチに動きだした。一一月が近づくほど「六一・一一ダイ改」即日集約を行った動労・鉄労の中に矛盾が集中し、いま総評脱退問題、『国鉄改革労組協議会』の中に矛盾が噴出している。いまこそ敵の矛盾を見すえ、総反撃に起とう。

総評が国労を支援してるから脱退？

動労革マル松崎は、脱退理由を、①総評人事問題、②総評大会で動労に対する中傷が行われた、③総評の国労支援、だとしている。こんな大ペテンはない。国労解体、全民労協加盟─（総評解体）をスローガンに掲げながら「動労中傷、総評の国労支援が気にいらない」というのだ。あげくに「これ以上とどまっても総評に迷惑がかかる」と居直っている。これで国労解体も自由にやれるという。

しかも、こんな重大な問題が動労各地本では何の提起も説明もないまま独善的によられているという。

また、鉄労内にあっては、相変わらず「動労革マルは信用できない」とのホンネの中で揺れながらヤハリ全国で矛盾が噴出しているのである。

昭和61年（1986年）8月21日（木曜日）
信濃毎日新聞

深まる国鉄「労・労対立」

国労支援の共闘会議結成 県評
切り崩し合戦へ
動労など4組合 当局との協力強

県評は二十日、県公務員共闘、民間共闘などとともに「国鉄労働者を支援する共闘会議」を発足させた。来年四月に予定されている国鉄の分割・民営化を前に、当局によ…を守るとのねらいで、「事実上、国労を擁護していく運動体」（松田康一県評事務局…）協調路線を歩む動労、鉄労、全施労三組合に加え、今月十二日には国労脱退者を…発足したばかり。四組合と国労との「労労対立」が深まる中で、県評が国労擁護…り、県内の国鉄労働運動は新局面に入った。

国労擁護の姿勢を打ち出した共闘会議結成総会。国鉄の「労・労対立」は激化する一方だ

「共闘会議」、本（小島友一…を受けて生ま…よると、国…活用セン…集中配置…ての国…当局側…いう。…態…動

まっと秋田 No.3 1986.7.15

国労にいては当局にゴマをすっても雇用は守れぬ。

朝日 86.8.22

改革労協はまた、新会社での労組の主導権を握るため、いまから多数派になろうと、当局と一体になって国労組合員の脱退工作を強めている。先の全施労大会で、動労の松崎明委員長は「だめな労組（国労）を引き抜き、消えてもらう」と述べた。

その大会で全施労の上部団体、新産別の富田弘隆書記長は再考を促した。「ストをするしないは、労使で宣言するようなことではない。いじめは、おん念を拡大再生産するだけだ」。だが、会場の雰囲気は、馬耳東風の感があった。

国鉄新聞 86.8.22

鉄労新潟 委員長が突如解任

鉄労新潟地本（六千人）に十五年間も君臨しつづけて、"天皇"の異名をとってきた風間委員長（六〇）が八月五、六日の定期大会で突如解任された。解任を求める理由を二つ。「分割・民営化」を…というのでは組合員感情にそわない。二つは、鉄労は労働組合の範囲を超えて経営権（人事発令、昇格、抜てきなど）に介入し、組合を自らの出世に利用している。「新鉄局に局長が二人いる」とさえいわれている。

チラシはこのように背景をて、さらに鉄労を弾劾している。「鉄労の非民主的体質にはついていけない」鉄労はファッショ的体質」「もの言わぬ労働者集団をつくり、ことなかれ主義の幹部を生み」「およそ労働組合らしからぬ実態」にある。だから警鐘を鳴らし、鉄労を民主化しなければならない、というわけである。

政府・自民党・国鉄当局を強力な後ろ盾として、「分割・民営」に向かって騎虎の勢いにあると見える鉄労にも、さまざまな矛盾が吹き出していることを、今回の解任劇は暴露したものといえる。